

48. 脳卒中患者における心理機能の変化・高次脳機能障害が

機能改善に及ぼす影響について

日比野病院リハビリテーション科作業療法士¹，日比野病院リハビリテーション科医師²

○小川 修路¹，濱 聖司²，助金 淳¹，山田 寛之¹，木村 優子¹，竹内 雪絵¹，

治郎丸 友里子¹，高野 美穂¹，岡村 悠弥¹，川村 良司¹，前迫 由希子¹，

兒玉 健太郎¹，小池 てまり¹，中村 健作¹，房野 義徳¹

【はじめに】

脳血管障害を発症した人たちの中には抑うつや不安，自発性の低下といった心理機能の変化，注意水準の低下や記憶力の低下といった高次脳機能障害をきたすことがある。これらはリハビリテーションを行っていく上で支障となる。そこで我々は脳血管障害患者の中にどの程度心理機能の変化や高次脳機能障害を呈する方が存在するのか調査を行った。

【対象と方法】

対象は当院に入院し，リハビリを実施した脳卒中患者 145 名。

方法は，抑うつや不安，自発性低下については「不安抑うつ尺度（Hospital Anxiety Depression Scale : HADS）」と「やる気スケール（Apathy Scale : AS）」，注意障害については「Trail Making Test : TMT」と「標準注意検査法（Clinical Assessment for Attention : CAT）」，記憶障害については「日本版リバーミード行動記憶検査（The Rivermead Behavioral Memory Test : RBMT）」を用いてスコアを抽出し，結果の比較を行った。

【結果】

HADS にて抑うつを認めた患者は 27.6%，不安を認めた患者は 20%，AS にて自発性低下を認めた患者は 44.1%であった。

TMT part A にて遂行に何らかの問題があった患者が 43.9%，そのうち実施困難な患者が 8.6%であった。実施できた患者のうち，遅延が認められた患者が 38.6%であった。TMT part B にて遂行に何らかの問題があった患者が 49.6%，そのうち実施困難な患者が 42.4%であった。実施できた患者のうち，遅延が認められた患者が 12.5%であった。

CAT ではほぼ全ての項目で約半数の患者に何らかの注意機能の低下を認めた。平均すると，実施した 126 名中 59.8±15.6 名に注意機能の低下が認められた。

RBMT にて行動記憶障害を認めた患者が 37.2%であった。

抑うつや意欲低下を呈する患者は，注意障害，記憶力障害などの高次脳機能障害が重症化しやすい傾向があった。

【考察】

記憶障害，注意障害などの高次脳機能障害，そして抑うつ，不安，意欲低下などの心理機能の変化は脳血管障害患者にかなりの割合で認められた。各々の障害は，互いに関連しあいながら，ADL 動作の獲得に支障を来たしていると考えられたので，高次脳機能障害や心理検査を行いつつ，何らかの対応をとり，自宅退院に結び付けていく必要があるものと考えられた。ただ，テストのばらつきが大きく，低下した項目と各 ADL 動作との関連性が不

明な点が多い問題点が明らかとなった。今後症例を増やしていき、これらの機序を明らかにして、実用的なリハビリアプローチを構築していきたいと考える。

【まとめ】

高次脳機能障害や心理機能の変化と ADL 動作との関連性を明らかにしていき、自宅退院や社会復帰を促進していくことができるよう、今後も継続して取り組んでいきたいと考える。